かぶと町回顧五十年

金解禁・敗戦・高度成長・石油危機

壁井与三郎 著

東洋経済新報社

かぶと町回顧五十年

── 金解禁・敗戦・高度成長・石油危機 ──

壁井与三郎 著

東洋経済新報社

著者紹介

明治43年　愛知県に生まれる.
昭和8年　早稲田大学卒業と同時に東洋経済新報社に入社. 一般経済部長となる.
昭和21年　財団法人日本経済研究所設立に参加, 調査部長を経て副所長となる.
昭和25年　投資経済社に転じ, 常務取締役編集局長を経て社長となる.
昭和34年　第一証券に転じ, 取締役調査部長となる. (42年より3年間株式部長兼務)
昭和47年　日本ポートフォリオ・サービス(株)設立され, 専務取締役となる.
昭和55年　社名を第一投資調査センターと変更と同時に辞任, 顧問となり今日に至る.
著　書　『100万人の投資教室』(投資経済社).
現住所　東京都大田区南馬込2-13-9

かぶと町回顧五十年　**定価1500円**

昭和57年4月22日 発行

著　者　壁井与三郎
発行者　中井義行
発行所　東京都中央区日本橋本石町1の4　東洋経済新報社
郵便番号 103　電話03(270)4111(大代表)　振替口座東京3-6518

© 1982 〈検印省略〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします.
2060-7114-5214
Printed in Japan

はしがき

金解禁政策が金の大量流出と大不況をもたらして失敗に終わったのは昭和六年末のことだが、この政策に当初から猛烈に反対して来た石橋湛山、高橋亀吉両氏の名声はとみに上がり、経済学を専攻する学生の憧れの的となったものだ。幸い私は昭和八年東洋経済新報社に入社を許され、石橋さんの直接指導を受けることが出来るようになったが、石橋さんからは何者をも恐れぬ批評家精神を叩き込まれると同時に、その洗練された文章、精緻な論理的展開からも大きな刺激と影響を受けた。日本経済研究所に転じてからは所長の高橋さんから受けた影響も大きい。徹底的な分析を基礎にして新傾向を推断する手法は、その後の私の論述形式を一変させた。

日本経済研究所で私が主査となって、「貿易の再開と日本産業の将来」という研究をまとめた際、理事の村瀬直養氏（元通産次官）から激賞されたが、高橋さんも「これを二倍くらいの分量にして出版し給え、何なら僕と共著ということにしてもいいよ」という助言を受けた。しかし間もなく高橋さんはパージとなって研究所を退き、私も高橋さんの推薦で『投資経済』の編集長となったので、時務に忙殺されてついに高橋さんとの約束を果たすことが出来なかった。しかし、高橋さんの経済史の研

究に刺激されて、何時かは自分なりに財界変動史をまとめてみたいと考えて、資料の収集には注意を払って来た。

ところが、昭和五四年九月『株式にっぽん』の編集長前野実氏の来訪を受け「雑誌に連載したいから、〝かぶと町回想録〟を書きませんか」という話である。「あなたのように半世紀にわたって兜町を客観的に眺めて来た人は珍しい。金解禁前後から始まって敗戦、高度成長、石油ショックと日本経済は文字通り激変したが、これを兜町はどう受け止め、どう対応して来たか、あなたの眼でみた回想録を是非書いて貰いたい」と口説くのである。私としても資料はかなりそろっているし兜町という特殊の視点から書いたら案外面白いものが出来るかも知れぬと思い、執筆を快諾した。こうして一一月五日号から六五回にわたる長期連載物が生まれたのである。

昭和五六年の一〇月、連載を終えてほっとしているところへ、東洋経済新報社出版局の渡辺昭彦氏がやって来て「『入門会社四季報㊙利用法』という単行本をつくるから、〝会社四季報を利用してポートフォリオを組む〟というテーマで原稿を書いて貰いたい」との依頼である。勿論快諾した。そして出版のことについていろいろ話をしているうちに、「『株式にっぽん』に連載した〝かぶと町回想録〟を一本にして出版してみたいと思っている」と話すと、「それは是非東洋経済で出版しましょう、コピーしたものがあったら見せて貰いたい」という。こうして話は急速に進み、『株式にっぽん』の前野氏からもOKを貰って出版の準備に入った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

出版に当たっては、①東洋経済の思い出を記した「自由主義の総本山・東洋経済」、②誠備顧問室グループの買い占め事件をあつかった「強引な株式買い占め団の壊滅」、③昭和五五～五六年の外人の日本株買いの状況を述べた「第三次外人投資ブームの展開」の三篇を書き足し、興味本位に書かれた一五篇を割愛した。このため全体がいささか硬いものとなったきらいはあるが、記述に当たっては簡潔、平明を旨としたから、一気に読破してもらえるものと確信している。

私は去る二月四日、七二回の誕生日を迎えた。東洋経済入社から数えて四九年、足かけ五〇年になる。本書がこのような形で、思い出多い古巣の東洋経済から出版されることについてはいささか感慨なきを得ない。

本書が、証券研究に志す若き人々のためによき手引きとなれば幸いである。

最後に、本書の出版に際し、東洋経済新報社出版局の渡辺昭彦氏が示された、並々ならぬ御好意に対しては感謝の言葉もない。記して感謝の微意を表す次第である。

昭和五七年三月

壁井与三郎

目次

はしがき

一　思い出の東洋経済……1

自由主義の総本山・東洋経済（2）

石橋湛山・高橋亀吉ライバル物語（8）

『会社四季報』のライバル達（16）

二　再禁止から準戦時体制へ……23
林荘治金解禁相場で大勝利（24）
高橋財政による景気回復（28）
ソシアルダンピング論高まる（32）
高橋亀吉氏グレゴリー教授を論破（36）
二大クーデターの狙ったもの（40）
二・二六事件で当てた「売りの山種」（45）
三　戦時体制から敗戦まで……51
悲劇の相場師太田収（一）（52）
悲劇の相場師太田収（二）（56）
投信の急成長と終戦処理（60）
ついに太平洋戦争に突入（65）
敗戦後対策を考えた人々（69）
ついに終戦を迎える（74）

四　日本経済の解体・苦難の再出発……79
集団売買始まる（80）
新円切り替えと証券界（84）
インフレ論争の沸騰（89）
財閥解体と証券の民主化（93）
企業再建整備と集中排除（97）
ドッジ・ラインの登場（102）
新証券取引所の生誕（106）
旭硝子の大仕手戦（110）
資産再評価と無償交付（115）
朝鮮動乱と株式ブーム（119）
陽和不動産の買い占め（124）
五　もはや戦後ではない……129
鉄にかけた西山弥太郎の執念（130）
石山賢吉氏と東通工（134）

投信の再開と巨大化（139）
兜町は宝の山と説く山種さん（143）
東洋電機カラーＴＶ事件（一）―色彩の鮮やかさに驚嘆（148）
東洋電機カラーＴＶ事件（二）―東芝テレビだった（152）
記者から証券マンへ（156）

六　高度経済成長で飛躍……161

所得倍増政策の登場（162）
岩戸景気の終えん（166）
優良大型株より成長株（170）
ついに証券恐慌に突入（175）
公債発行を聞いて大転換（179）
大蔵省の検査を経験（184）
大和ハウス株の狂騰（188）
第二次外人投資ブーム（193）
スミソニアン・レート（197）

過剰流動性相場の展開（202）
デノミ論議の変遷（206）
七　石油危機を乗り越えて……211
オイル・ショックの波紋（212）
石油危機が大発展の起爆剤（216）
強引な株式買い占め団の壊滅（221）
第三次外人投資ブームの展開（226）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　思い出の東洋経済

自由主義の総本山・東洋経済

入社当時の思い出

昭和八年三月一三日、私は東洋経済新報社から第二回目の面接の呼び出しを受け、指定された時間に出社して、受付に呼び出し状を提示した。受付氏は私を二階の小応接室に案内して、呼び出しがあるまでしばらくここで待つようにといって出て行った。

部屋には紺の背広を着た先客が一人いた。かん骨の張った、意志の強そうな、がっちりした青年である。私が椅子につくと、彼は「また一緒になりましたね。僕は斎藤というんです」といいながら名刺をさし出した。第一回の面接の時にも私の前にいた青年である。名刺には東京商科大学助手の肩書きがインキで消してあった。私も彼に名刺を渡した。「ああ君は早稲田か、ここは先輩がみんな早稲田だから心強いね」といいながら、おもむろに椅子に腰をおろして、煙草に火をつけた。そして「採用は僕等二人だけらしいな」と斎藤幸治君は、もう採用は決まっているといわんばかりの口振りである。

しばらくすると呼び出しが来て斎藤君は出て行った。三、四分経ったところで私も呼ばれた。主幹室に入ると石橋さんは血色のいい丸顔に笑みを浮かべながら、そこへ掛けたまえといった後、「君等

二人を採用することにした。初任給は四五円。安いけれどもそのうちに訂正するからしばらく辛抱してもらいたい」といい、「君等が若し都合がよければ、今日から仕事をして貰ってかまわない」とつけ加えた。私が「まだ背広を作っていないのですが」というと、石橋さんは「当分は学生服でいいよ。外へ出なくてもできる統計の分析でもやり給え」といった。

こうして、私は卒業式（二五日）前に就職が決まり、経済記者としてスタートすることになったのである。会社がひけると、早速恩師の杉森（考次郎）教授宅に電話して、入社決定の報告をした。

編集室ではみんな伸び伸びと仕事をしていた。私が何かの拍子に石橋さんのことを石橋先生といったら、先輩の根津（知好）さんが、「東洋経済では先生などという呼び方はしない。自分より先輩はサンづけ、同僚ないし後輩はクンづけでいいんだ」と教えてくれた。以後、今日まで三浦（前主幹）さんや石橋さんや高橋（亀吉）さんのような大先輩をもサンづけで呼ぶ習慣がついてしまった。

当時の東洋経済には出勤簿はなかった。自分の仕事さえ責任をもってやれば、いつ出社しようと、いつ退社しようと勝手であった。先輩の小倉（政太郎）さんは、よく夕食後の雑談の際われわれ若い者の間に割り込んで来て、昔は随分面白いことがあったよ、といって話しこんだものである。「月給が安過ぎる、もっと出せるはずだ。出せないというなら収支の決算を詳細に知らせて貰いたい、と三浦さんに申し込んだこともあるね。すると三浦さんは帳簿を持って来てこの通りだ、幹部だってそんなに沢山は取っていないんだ、といって収支を公開したから、二の句がつげなかったね」、「編集会議

は議論沸騰で物凄かった。おれに喋らせろ、といって相手の口を手で抑える者まで出る始末だった。何しろ当時は、石橋湛山、野崎龍七、高橋亀吉、丸岡重堯、不破棄一郎といった論客が揃っていたから、にぎやかだったね。三浦さんはこれをうまくまとめて行ったから大したものだった」と小倉さんは往時を回想してなつかしんでいるようだった。

高橋（亀吉）さんは、日本経済研究所時代に「東洋経済にいた時の勇み足」としてこんな馬鹿なことをしたこともあったんだよ、と私達に話してくれた。――東洋経済では春に社員の慰安旅行をやっていた。たまたま高橋さんが幹事になって旅行の一切をとりし切ることになった。高橋さんは従来のやり方は不公平だから、これを公平なものに直さねばならぬといって大改革をやった。宿に着いて夜の宴会が始まったら、社員を酒を呑む組と呑まぬ組に分け、酒を呑む組にはお銚子を配給し、呑まない組には料理を一品ふやしたのである。高橋理論によると、従来の宴会は酒の呑める連中が勝手に振る舞う不公平なものであった。この弊風を断固改革した、というのである。呑ん兵衛からごうごうの非難が出たのは当然だが、高橋さんは取り合わなかった。その後、高橋さんには幹事役は二度と回って来なかった、という。

こんな自由の空気が横溢していた東洋経済だったが、原稿に対しては、なかなか厳しかった。大学で経済を勉強したといっても、新米の記者は、実際の経済については、ほとんど何も知らないから、すぐ会社記事を書けといわれても、どこから手をつけていいか見当がつかないのが常である。そこで

先輩の書いた過去の記事を丹念に読み、新聞や雑誌の切り抜きなどを参考にして予備知識をつけ、営業報告書の一応の分析を行った上で、会社を訪問して記事を書くのだが、何しろ会社に対する過去の知識の蓄積がないから、上すべりの記事しか書けない。勢い編集者に呼ばれて、意地悪い質問をされた上、書き直しを命ぜられるのが落ちである。親切な編集者は丹念に筆を入れ、前後を入れ替えて、一応読める記事にしてくれるが、意地の悪い編集者は直さずに破いて紙屑かごに投げ入れて知らぬ顔をしていたものである。東洋経済で原稿を一番紙屑かごに沢山投げ入れたのは石橋さんだったといわれる。自由主義の総本山と自認していた東洋経済でも、記者の教育には昔風の徒弟制度的なものが残っていたようである。

戦時中の試練

しかし、昭和二桁となり、準戦時体制から戦時体制に入ると、東洋経済の自由主義は大きな試練期を迎えることになった。石橋さんの論説がしばしば当局の忌憚にふれ、厳重なる注意を受け、削除を命ぜられることが少なくなかった。元来、石橋さんは自由主義、民主主義、平和主義を理想とし「小国日本」で結構ではないか、これを基礎にして平和的発展を考えるべきだ、と大正時代から叫び続けてきた人である。軍部の対外膨張政策を強く批判し、三国同盟の如きも危険極まる暴挙ときめつけ、英、米を敵にまわして戦争をするなどとは狂気のさたと考えていたのだから、軍部に気にいられなかったのは無理もない。

軍に睨まれれば、当然用紙の配給は削減される。雑誌は薄っぺらいものにならざるをえない。これでは東洋経済は潰れてしまう、と心配し出す幹部が現われたのも不思議ではない。そこで、石橋さんの自由主義、個人主義をどうして全体主義に改めさせるかが問題となったことさえある。ある幹部は、毎週五階の会議室で行なわれる社内ゼミナールで「自由主義批判」をやったところ、石橋さんに鋭く突っ込まれて汗だくになってしまった。こういう問題となるとやはり石橋さんの独壇場だ。認識を新たにしたのである。

石橋さんは、その後機会ある毎に、われわれに節を曲げてはいけない。軍の機嫌をとらなければ潰すというなら潰されてもいいではないか。その時には諸君を路頭に迷わせるようなことはしない。万一に備えて経済的な準備は充分してあるから心配するな、と力説したものである。

一七年の一〇月、私達は理想社から新たに出版された石橋さんの『人生と経済』という著書を、石橋さんから直接もらった。表紙の見返しのところに著者のサインがしてあり、「壁井君に贈る」と書いてあった。

新著を読んでみると、石橋さんの哲学——物の見方、考え方が明白な形でえがかれていた。中でも個人主義と全体主義については、長いスペースを割いて詳述し、読む者をして納得せしめずにはおかなかった。石橋さんは、「この著書の中に再録した諸論文は、自分の考え方を具体的に展開したもので三〇年間その論旨は不変である」と記していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com